

# 日本海磯根対策試験（藻場造成）

## （要 約）

佐藤 康子・木村 博聲

深浦町北金ヶ沢地先には、離岸堤が設置され、その陸側が魚貝藻類の増養殖のための静穏域として活用されている。静穏域内には、アワビ放流用の投石漁場が造成されているため、そこで餌料藻場を形成することを目的に、幼胚供給によるホンダワラ類藻場の造成を試みた。

### 調 査 方 法

試験場所は、深浦町北金ヶ沢地先の離岸堤の陸側にある、水深7 m前後の投石漁場とした。

平成12年5月、フシスジモク、アカモク、ヤツマタモク、マメタワラ、ヨレモクの生殖器官を形成した主枝を採取し、大きさ50cm×80cm、目合い5.5mmの網袋に種毎に約500 gずつ入れ、各基質からの高さが30 cmになるように各々土俵に結着し、投石漁場西角に投入した。その後、周辺の藻場形成状況を観察し、平成15年2月、5月、8月、11月、平成16年2月に、形成された藻場の面積を測定した。

平成13年5月には、深浦町田野沢地先でモヅク漁に伴って漁獲された生殖器床を形成するヤツマタモクの主枝100kgを入手し、上記と同様の網袋に2.5kgずつ入れた。網袋8枚を1組として土俵に結着し、計5組を投石漁場中央に約5 m間隔で投入した。土俵を投入した周辺に2 m四方の観察区を設置し、平成14年9月、平成15年1月、2月、5月、8月、11月、平成16年2月にヤツマタモクの生育状況を観察した。

### 結果および考察

投石漁場西角で藻場の形成状況を観察した結果、幼胚供給から2年4か月後の平成14年9月には、各種ホンダワラ類が混生した小群落を確認され、メバル等が蝟集する様子が観察された。形成された藻場の面積を測定した結果、平成15年2月には投石漁場の約10%にあたる約1,400m<sup>2</sup>となり、生育するホンダワラ類の一部にはエゴノリが観察された。8月には同30%（約4,100m<sup>2</sup>）に拡大し、平成16年2月には同25%（3,500m<sup>2</sup>）となった。生育した藻体上には浮泥の沈着は見られなかった。

投石漁場の中央部分には、幼胚供給から8か月後の平成14年1月には28個体/m<sup>2</sup>のヤツマタモクが生育した。平成15年1月には17個体/m<sup>2</sup>、5月には16個体/m<sup>2</sup>、11月には13個体/m<sup>2</sup>、2月には8個体/m<sup>2</sup>となり、生育密度は経時的に減少した。幼胚供給から2年後の平成15年5月には、ヤツマタモクの体長は平均30.2 cmとなり、2 m四方の観察区内に生育した62個体のうち、31%に相当する19個体にエゴノリが、1.6%に相当する1個体にイシモヅクが着生した。

各調査時には、キタムラサキウニが1個体/m<sup>2</sup>出現し、ホンダワラ類を摂餌する様子が観察された。これから、キタムラサキウニの摂餌がホンダワラ群落の形成に影響を及ぼすと考えられるため、藻場造成のためには積極的に漁獲すべきであると考えられた。サザエは、平成15年1月以降に観察されるようになり、殻高70mm前後の個体が0.5個体/m<sup>2</sup>、平成16年2月には1.75個体/m<sup>2</sup>の密度で観察された。

このことから、ホンダワラ類の幼胚供給によって、投石で造成された漁場に藻場を形成できることがわ

かった。また、形成された藻場には、エゴノリ、モズクが着生し、さらに、メバル、キタムラサキウニ、サザエ資源が増加したため、水産資源増殖効果が期待できた。今後は、藻場の形成状況を観察するとともに、キタムラサキウニの摂餌によるホンダワラ類藻場の縮小が懸念されるため、管理手法の開発として、キタムラサキウニの漁獲を試みる予定である。